

平成29年9月17日

浜田市議会議長 西田 清久 様

議員名 岡本 正友



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成29年6月5日(月)～6月7日(水)

2. 視察先と内容

【6月5日】

① 網走市 東京農業大学 網走キャンパス

『オホーツクもおづくり・ビジネス地域創成塾の取組みについて』

講師

副学長 食品香粧学科 渡部 俊弘 教授

生物産業学部 地域産業経営学科 菅原 優 準教授

【6月6日】

① 網走市 郷土博物館

説明 米村館長

② 網走市 モヨロ貝塚館

説明 米村館長

③ 網走市 オホーツク流水館

説明 流水館ガイド

④ 網走刑務所『刑務所と地域の関係と役割』

説明、案内：麓 学 網走刑務所長

⑤ 網走市 博物館 網走監獄・・・見学

⑥ 北海道立 北方民族博物館 説明：館内ガイド

3. 参加者 牛尾 昭、芦谷英夫、江角敏和、小川稔宏、岡野克俊
上野 茂、岡本正友、野藤 薫、

4. 調査経費 72,641円

5. 調査研究活動の概要

別紙



●東京農業大学 オホーツクキャンパス

『オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾の取組みについて』

当日は、お忙しい中、渡部教授、菅原準教授、小畑事務部長の歓迎を受け丁寧な説明を受けた。まず、渡部教授より東京農大の歴史、浜田市出身の三浦肆玖楼が5代目の学長であった事など、浜田市とのご縁が有ることなどの話をお聞きした。

オホーツクキャンパスの学生1600人のほとんどが、地元以外から入学し、地域で生活している事、また地域産業のホタテ養殖や飲食店などのアルバイトなど、網走市の産業、経済や地域活性化に大いに貢献していると話された。

次に、菅原準教授から、オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾の取組みについて、当日不在でした黒瀧秀久 生物産業学部長の資料により説明をして頂いた。

この事業は、大学の地域貢献と地域活性化、リーダーとしての人材育成を目的に2010年から『オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾』を創設、産官学連携で地域の社会人受講生を受入れており、当初は文科省の補助事業「地域再生人材創出形成拠点のプログラム」として採択を受け、現在まで7年間で延べ121名（複数回の受講者有り）を数えている。

北海道は大規模農業が多く、原材料の供給の役割が大きく、大量＝低コストで経営がなされていた。そこで付加価値をつける為、二次加工、三次販売へ結び付ける事が必要であった。

受講生は公募とし様々な業種から人材が集まってきたが、唯一お願いしたのが網走信金で毎回1名の参加をお願いした。

地域創生塾の受講生同士の交流から、今まで12の新規事業と46商品の開発がされている。業種別では1次産業に36名就業14商品の開発、2次産業は18名就業の17商品の開発、3次産業は58名で15商品、5事業が成果となっている。

成功事例として、北海道産の生めんのひやむぎや、土日限定のスイートポテト、海産物と農産物のコラボレーションでシーフードグラタンを開発、三越のギフトセットでも良く売れている。

大学の持っている資源と、地域の技術を併せて、網走・道東地域の発展につなげていく事、地域を担う人材育成をしている。

【質 問】

Q：市の補助金は有るのか？

A：商品開発のステージに合わせてメニューは有る。年30万だと思う。

網走信金と協定し新規事業に1件あたり10万円、年間5件まで支援している。

Q：塾の期間と時間は？

A：当初、文科省補助事業（年間2～3千万）で2年間のコースだった。その後、市の補助事業として（1千万）1年コースになった。

夜6時から一コマ90分授業、商品開発など加工実習などは土日を利用している。そのほか、異業種の話合いの時間も作っている。

Q：北海道産の農産物の品質は

A：小麦などオーストラリア産小麦が良い（加工適性として）、香りは道産小麦が良い。

Q：刑務所との接点は有るのか

A：修了生が監獄の商品開発の手伝いはしている。大学としては直接の接点は無い。

Q：大学と地域の連携事例は有るのか

A：網走市と大学との事業をする前に、帯広市（帯広畜産大学と帯広信金）や北見市（北見工業大学と北見信金）では大学と金融機関が地域活性化で連携協力しており帯広市の事例は注目している。

Q：産官学の連携で、商品開発や販路など何処まで見据えているのか

A：商品開発は大規模農業では、商品開発、販売への転換は難しい、原料供給地域としての役割は今後もになって行くと思う。
本業は大規模農業なので、6次化での商品については本業との兼ね合いが難しい。



渡辺教授



菅原準教授

● 網走郷土博物館

郷土博物館において、網走市議会の山田庫司郎議長から『網走市は390億の農業生産額で、水産業は加工も含め280億の生産額となっている。観光を目玉にと資料館など5施設も充実しており、またラグビーWカップに向けて整備を行い、スポーツ合宿を誘致している。是非見て頂きたい。』と歓迎の挨拶を受けた。

その後、郷土博物館（分館・モヨロ貝塚館）の米村館長から説明を受けた。

【説明：米村館長】

趣のある建物ですが、昭和11年に北海道で初めて博物館として地域の歴史と自然を知って頂く為、出来た。1階は自然の物を展示し、2階は歴史の物を展示している。道立北方民族博物館の開館が出来るまでは入館者は年間5万人だったが、開館後は5千人位で推移している。本館の運営費は約800万、特別展は45万の予算がある。館長と受付含め4人で運営しており、分館としてモヨロ貝塚館がある。

資料が多く、全て展示出来ないので、市内の古民家や廃校になった小学校を資料収蔵場所として使用している。

※モヨロ貝塚を発見した米村喜男衛は、米村館長の祖父で、発見に至る経緯、ご苦労や資料館が出来た経緯など、貴重な話をお聞きした。
また、米村喜男衛は司馬遼太郎『街道をゆく』の中で、曰く「日本のシュリーマン」であると言われている。



博物館前にて



1 階 展示資料

●郷土博物館 分館 モヨロ貝塚館

【説明：米村館長】

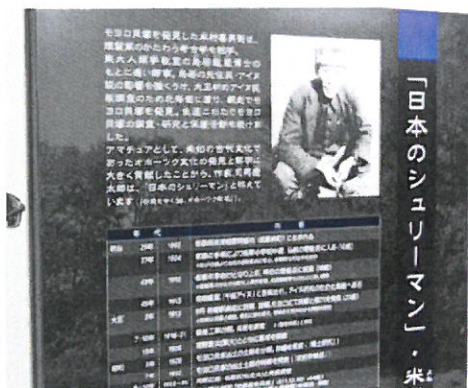
この施設は、平成25年5月に新しく開館したが、建設計画から完成まで12年かかった。

貝塚の遺跡の上に有るので、文化庁から多くの規制があり、建物の杭を打ってはいけないとか、現有施設以外の新たな施設は作る事が出来なかった。

唯一、遺跡展望のスペースとして、休憩所が出来た。

また、文化庁からの予算は建設費のみで、展示等に関する予算補助は無く、展示で苦労したが、貝塚地層展示などは職員で手作りをした。

駐車場は遺跡内に出来ないなので河川敷に設け、河岸段丘のモヨロ貝塚館に道路を挟んでタワーを設置し、階上通路でつながっている。



米村喜男衛



埋葬されたモヨロ人の展示

●オホーツク流水館

【説明：流氷館ガイド、三島さん】

昭和55年の開館で、平成27年7月新たに建設費15億円をかけて同じ場所に開館した。

北緯44度に位置する網走市で、流氷が海を覆い尽くすのは自然（アムール川、オホーツク海）の造り出す奇跡である。流氷館はその自然の営みを音と映像で体感させている。

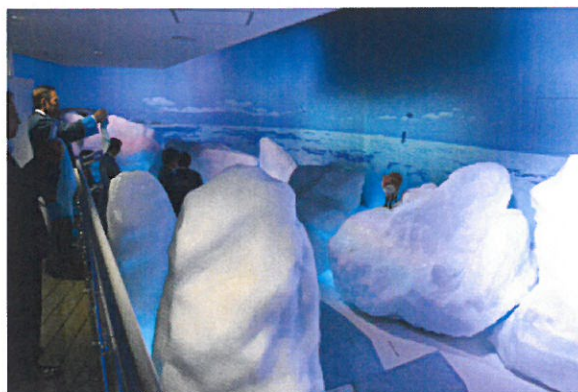
流水は、極東ロシアのアムール川からの水が表層でオホーツク海で北からの季節風に冷やされ、蓮状氷となって南下し、成長し盛り上がりながら、北海道沿岸に押し寄せる。

その事により、この海域はプランクトンが多く豊饒の海となっている。

この施設は、オホーツク固有の魚類（クリオネ、なめだんご）の展示、流水展示室でマイナス20度の世界が体験出来る。



オホーツク流氷館にて



流水の展示室(-20度)

●網走刑務所

【説明：麓 学 網走刑務所長、廣田 肇 総務部長、山端 忠晴 処遇部長】

この刑務所は、浜田市に有るあさひ社会復帰促進センターと違い、北海道独特の歴史となり立ちが有る。

刑務所が観光地になっているのは、網走だけで、高倉健の映画『網走番外地』の影響で、職員としては網走市に貢献していると思っている。

ここは銚子、二見ヶ丘、住吉の3つの農場を持っており、東京ドーム351個分の敷地でほとんどが山林で有る。

西南の役などでの反乱旧士族を北海道開拓に収監し、北見と旭川を繋ぐ道路建設で昼夜の突貫工事を行い、収容者と看守に多くの犠牲者を出した。

平成24年3月に現在の施設が完成したが、その歴史は博物館 網走監獄で見る事が出来るので、是非見てほしい。

ここの現在の収容率は60%程度で、全国的にも右肩下がりである。犯罪が少なくなっているのかは不明であるが刑務所の役割は変わらないと思っている。

ここの受刑者は約80パーセントが関東近県からで、北海道内が13パーセント、刑務作業は農場の作業が多いので若い受刑者が多い、累犯は4回位である。木工製品に使う木は敷地内の山林から切り出し40年物である。

農作物、黒毛和牛（A5ランク、監獄和牛ブランド）も育てている。窯業、金属加工、造林等も特徴的な物です。職業訓練（建設機械免許、溶接、農業技術3級など）

【質 問】

Q：地域と更生に向けた連携、繋がりには有るのか

A：中・高での薬物乱用防止の講和を社会貢献としてやっている

ボランティア団体から図書の寄贈を受けている。保護司や更生保護女性会の見学等

Q：刑務所内での教育プログラムが社会復帰の為になるのか

A：出所後の事については、刑務所側としては追跡は難しい。資格を取る中で頑張ったという自覚、自信が、その後の人生にとって為になると思っている。

様々な事で目覚めると更生して行くが、何が気付きに繋がるか分らない。

Q：仕事や住まいなどが無いと刑務所に戻って来る事が多いのでは

A：出所後の特別調整をきめ細かにしている。社会福祉士の派遣なども有る。

Q：刑務所は地域にとってどう思われているのか

A：迷惑施設かも知れないが、ここから出て行けと言う事は無いと思う。

Q：出所者の金銭面はどの様になっているのか

A：引き受け人の出迎えが有れば良いが、本人の貯めているお金と、帰住支援金も有るが、外に出ると仕事先や帰住地に行くとは限らない。中に居る時と外に出た時と考えが変わるのではない。

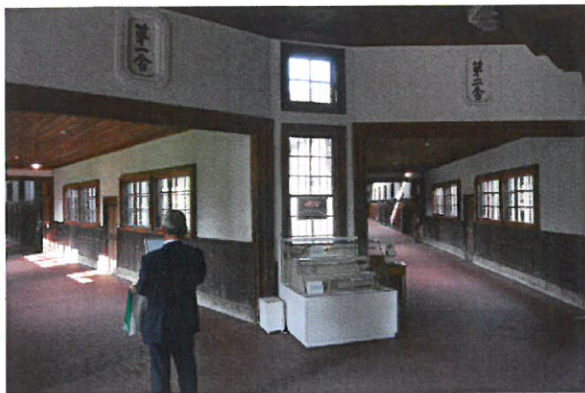
Q：和牛飼育などで出所後は農業、起業と進む人はいるのか

A：自分で起業という事は、中々難しいと思う。下で働くなら可能かもしれない。



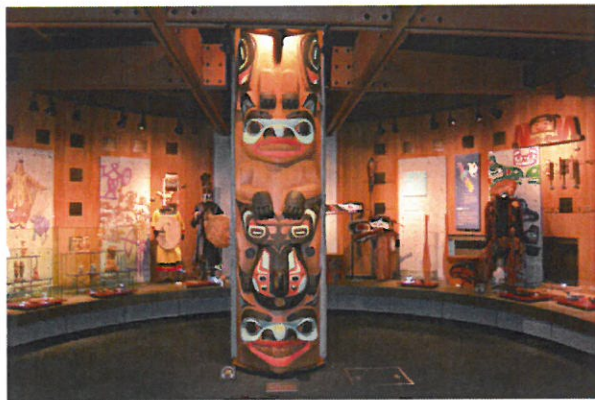
刑務所 会議室で麓 学（ふもと まなぶ）所長の説明を聞く

●博物館 網走監獄【見学】昭和58年に開館



中央監視所から5つ有る。放射状の収容棟

●北海道立 北方民族博物館【見学】



アラスカ先住民の、トーテムポール



モヨロ貝塚からの出土品



北方民族イヌイトの縦穴住居（復元）

【感想】

網走市の行政視察の目的は、浜田市には島根あさひ社会復帰センターと島根県立大学の二つの施設があるように、網走市には東京農大オホーツクキャンパスと有名な網走刑務所がある。

同じような施設を持つ状況の対比から、課題と解決への方策を学びたいと思った。また、多くの郷土資料館・博物館等を官民挙げて、運営をされている状況からも、浜田市のこれから先の郷土資料館の必要性やあり方について学ぶことも、もう一つの目的である。

東京農大オホーツクキャンパスでは、地域人材の育成や特産品開発、六次産業化など多くの実践事例を聞いた。地域産品の付加価値をつける為に大学が積極的に産官学連携を図り、商品開発や起業を促進されている状況など、その取り組みについて十分理解ができ、参考になった。

また、豊かなふるさと自然環境を後世に残していくためには、市民の理解と協力が不可欠であると考えているが、網走市では、地域の様々な資源を活用しながら、産官学地の連携など多くの関わる協働のシステムの構築がされていると感じたところで、浜田市でも県立大学をもっと地域に、有効活用すべきだと感じたところである。

そして、網走刑務所の社会復帰への状況については、地域との連携状況や 出所後の再犯防止に向けた活動をきいたが、ほとんどの帰住先が関東近辺で、再犯防止に向けた関わりは難しいとの事であったが、地域からの慰問などのほか交流はなされているようである。

浜田市より約1万8千人も少ない約3万9千人の網走市での資料館の状況についての視察から感じたことは、観光産業としての歴史ある建物の郷土博物館や、眺望が素晴らしい流水館などは学習機会の場にもなっている事から、自然学習、歴史学習などに多くの来館者が有るようである。また道立北方民族博物館の展示、体験資料が充実しており見応えがあり、浜田市の資料館の充実に向けて、大いに学ぶべきところがあった。